

四 民謡・わらべ歌

(一) 祝歌

民謡・わらべ歌については、福生市周辺の各市町村で歌われているものと、ほぼ同じである。すでに概説でも少しくふれたが、昭島市で民謡を伝承している老婦人たちに、青梅とか福生という出身者が多かった。嫁いだ先が昭島市であったわけだが、すでに作業歌をうたう時代がすぎても、ほとんどの人たちが、同一の歌として口ずさむ光景に接することができた。民謡というものは作業歌なら作業をした人が、その作業を再現することにより、リズムも乗り、歌もでてくる。動きのともなったものの歌は、じつに正確に歌われている。

数々の民謡を採集していても、いつも考えさせられることは、いま歌われている歌を、誰が継承してくれるだろうかという危惧であった。調査報告とともに、音としての記録も再録できたことは、少なくとも再現の道はひらかれている。そのせめてもの光りは、正確な歌詞の記録によって、明確になった。それぞれの内容は、報告ごとに述べた。説明を読めば分ることなので、ここではふれない。めずらしい民謡も採集できたことも含め、収穫の多い民謡の報告ができたことを、ともによろこびたい。なお、採取した曲ごとに伝承者名を記しておいたが、生年については巻末に掲載することとする。

大黒舞

大黒舞いは一般庶民の中に親しまれた祝歌であるが、もとは遊芸人や太神楽の余興など正月の門付け芸として広められたものである。江戸時代の江戸の正月には大黒様の衣裳を着た遊芸人が沢山いて活動していたが、それが全国（特に東北地方）に分布したものである。

- 一つ 俵をふんまいて
- 二つ につこりと笑って
- 三つ 酒蔵おっ立てて
- 四つ 世の中良いように
- 五つ 出雲の若多びす
- 六つ 無病そくさいで
- 七つ 何事ないように
- 八つ 屋敷を買い広め
- 九つ 小蔵をおっ立てて
- 十で とつくりおさまった

頭梁送りの歌

この歌は家屋新築の際の上棟式の祝い歌である。上棟式がすみ、その下で祝いの宴がひらかれ、その宴たけなわの中に棟梁送りが行

(熊川地区被調査者全員)

(宮尾)

なわれるのである。末広りの飾りをつけた真新しい檜木の柱を先頭に、歌を歌いながら大勢の祝人縁者が棟梁を自宅迄送って行くその道中で歌われるものである。最近では総てが簡略されあまり歌われる事もないが、お座敷歌として、また祝い歌として宴席などで歌われているものである。

木遣り（大榎）

へえーえーよい（ヨイ）

めでためだにて

※ これわいせー えーよいせー

えーよいやせ

（以下はやし言葉及び※部分を略す）

へ女網男網にて

へそろいましたにて

へめでたくたのみまして

へめでたくおさめまして

へひとしめたのみまして

（上野三平、横田啓介）

（二）伊勢音頭

伊勢音頭ほど広く多くの人々に歌われている歌も少ないであろう。伊勢音頭は伊勢神宮を中心として歌われていたものである。神宮参りの人々に賑わいを見せていた近辺の料理茶屋の茶屋女が、三味線にのせて酒盛り歌として、全国から集まる伊勢講中などの精進落しの宴席で歌う様になつて一層有名なものとなつたのである。したがつて伊勢みやげとしてその道中を歌いながら泊りを重ね伊勢参りの旅をしたものである。そして此の歌を旅芸人などがおぼえ、全国の隅々まで広めていったのである。全国に伝えられている伊勢音頭には、盆踊り歌とするもの、祝歌とするもの、またお座敷歌とするもの、色々であるが、当地に伝えられている伊勢音頭は口説音頭であり、伊勢音頭の元の姿を整えているものと思われる。また、はやし言葉のヤートコセーは二十一年に一度おこなわれる伊勢神宮の御遷宮にその材木を運ぶときの木遣のなごりである。

へ伊勢はなー津でもつ

津は伊勢ーでもつ

尾張名古屋は やんれ城でもつ

きたこら やれやさーせーよいやな

ころばつて起きて なんでもせー

へ二十なー四季の竹の子堀りわな

鎌をかついで こらやんれ小雪の中

（口説）「はてがてんがゆかし、身にふせてある時は、悲願空に

乱れ、仮の寝ぐらを 籠の白鳥、ころそうと生かそうと、手の内雀、たしかに手ごたいこの下に、やれまて栄蔵、源氏のきかん、そちにはやらぢ兄が、出世のためとするわい、兄者人無理ではないか、おー無理じゃ無理ぢや無理ゆうも兄のえこ、母親がらすの考行は昔、山のものめがそのけ、どっこい、そうは行きますまいお舟に次ぐはこの栄蔵、貴殿見事に突いて見せ、いーさ いーざ」

へいざいざーやーともせいーよいやな

ありやりやんりやん

これわいさーの なんでもせー

へいざり勝五郎 車に乗せてなー

曳けり初花 こらやんれ箱根山

(口説) 「ここらあたりは山がゆえ紅葉のあるのに雪が降る、さぞ寒むかったで御座んせう。いやいやわし車に乗せいらば心棒するが今宵そなたの曳くつらさ、過分だぞや 嬉しいぞや。あれまた勝さつんとした事が女房に向つて礼ゆう者が何処にごさんしせう。してあれなるね。いずれ様の御在所。敵のあんび静かにせよ。風に耳静かにせよ。

へ曳け曳けーやーともせいーよいやな

ありやりやんりやん

これわいさーの なんでもせー

へおばばなー何処へ行く

三升だるさげてな

(口説) 「背中にしよつたる風呂敷はお米が三升にかつをぶし、お歳はとつてもほね坂越えても行かなきやならない嫁の在所え」

へこらやんれ 孫だきに

やーともせいーよいやな

ありやりやんりやん

これわいさーの なんでもせー

(齊藤真一)

(三) はやり歌

明治から大正そして昭和の初期にかけて、その時代時代の出来事や風俗を評したものを歌詞とした様々なはやり歌、演歌と称するものが全国に広まっていた。それらの歌は、盛り場や縁日などで、バイオリンを弾きながら時代を風評した歌(自作が多かった)を歌つて人々を集め、その歌本を売つて歩いた演歌師などによって広められたものである。木綿の着物に袴をつけ、学生帽をかぶり、朴鹵の高下駄をはき、一見して大正時代の書生風の姿のいでたちであった。この演歌師は都市のみではなく地方の町村にも沢山行動していた様である。また地方によっては貸屋によって広められた所もある様である。これらのはやり歌は、宴席で非常によろこばれ、余興として多く歌われ庶民に親しまれていたものである。福生市には当時の東京の大震災の模様や東京の風俗を歌つたものや、その節をまねて砲丸投げの選手を応援する、応援歌なども残されて居り貴重なものである。

パイノパイ節

〱東京で名物 満員電車

いつまでたつても乗れやしねー

乗るにやけんか腰 命がけ

やつとこさつと空いたのが来やがっても

だめだーめと手をふって

またまた止めずに行きやがる

何んだ故障車か ぼろ電車め

だめだったら

うっちゃつさやいどぶん中へ

パリことパナナで ふれふれふれ

東京にも裏には裏がある

鳥もかよわぬ島というか

お天とう様も顔見せぬ

暗くてくさい穴のような

ブタ小屋かと思つたら

どういたしまして人間様が

住んで居ります 生きてます

らーめちやつたら

ぎつちよん ちよんで

ばいのばいのばい

パリことパナナで ふれふれふれ

世界の平和はどうなるのか

フランス パリに集つまつて

何んにもくれまいくれまぐそ

なだまん領事は西園寺

奥さんべつびんさんで

ばいのばいのばい

パリこと競走で ふれふれふれ

東京大震災（演歌）

〱時しも大正十二年九月一日正午頃

大地にわかによれいだし

従また横にゆすふれて

家は破壊し人つぶれ

山はくずれて土地は裂け

世のはめつかと思われて

人に生きたる心ちなし

たちまち四方に大火災

あがると見れば古枯しの

秋の木の葉を巻くごとく

燃え広ろがりてすぎましく

えんえん天にみなぎりて

地は火の海となり果てん

ありしよれつろの生き地獄

無残や死者に数十万

（斉藤真一）

てきのぼういのふるうとき

人の力のあわれさよ

盛大繁昌をきわめたる

帝都むなしく天災に

焼野の原の白けむり

消えてはかないたい橋を

終月寒く照すなり

人の心も奥そこに

愛のはきつく泉みあり

死線を越えた被災者を

すぐわんものと同胞も

万国民も一せいに

さいきの奉仕をささげたる

公儀にむくいてあるべきや

親権 人権 公権よ

明治天皇（演歌）

明治天皇ご参拝

なされるようになりました

それを出迎かい向うから

人力車に乗ってくる

デカンショ節（応援歌）

熊川選手にや羽根ないけれど

こうりや こうりや

かけりや鳥よりなお早い

ヨーイ ヨーイ デカンショ

鉄の砲丸うけては飛ばす

こうりや こうりや

投げりや向うの山までも

ヨーイ ヨーイ デカンショ

ヒヤヒヤ節

あめかーあられか

鉄砲のお玉が

来ますけれども

敵をうちませかね

こら大将さん

あーら いったい ぜんたい

ぜんたい 十六連隊 連隊 大隊

軍曹 曹長 総隊長もみんな進め

特務曹長もくり出しちやつたね

ヒヤ ヒヤ

（森田喜一）

（高水茂一、野島房子）

（高水茂二）

角力甚句

（田村シズ）

へようたようたよ五句の酒で

一合のんだはどなたゆえ

へ角力にや負けてもケガさいなけりや

ばんに私が負けてやる

へめでためだが三ツ重なれば

中に鶴亀五葉の松

(横田啓介)

(四) 作業歌

棒打ち歌

棒打ち歌は麦打ち作業の労作歌である。真夏の天気の良い日に、農家の庭先いっばいにむしろを敷き、その上に刈り入れた麦の穂を広げ干し、カラカラに乾燥したところを、何人かが向い合って、くるり棒(二メートル五〇位の棒の先にもう一本の一メートル位の棒をクルリと回転する様に取り付けた物)という農具を使って麦の穂を打ちほぐす作業である。真夏の炎天下に行なわれる作業で、汗とほこりで顔はまっ黒となり、そのうえ、麦打ちの度に乾燥した麦の芒がとび体の至る処にささり、俗に芒げっばい、という気持の悪さも手伝って、大変な重労働であった。その際、両側の人たちが替わる替わる声をかけあって歌うのが棒打ち歌なのである。この歌は重労働の作業をスムーズに進めるためのものであるが、その仕事を早くすませる事の督促の歌などにも歌われていたようである。例えば、夏場であるから午後になると夕立雨を警戒しなければならぬ。したかつて夏空に雲が一つ現われても「大岳山に黒い雲

あの雲がかかれば雨か嵐か」などの歌って麦打ちの回転を早くさせ

麦打ちを急がせるのである。この麦打ちを体験した古老の話では、

麦打ちの仕事中に歌など歌う気分にはなれなかつたという、それは

重労働の上体じゅうが芒げぼくなり、早く仕事を終らせて風呂か水を浴る事しか考えなかつたと語っている。

へ大岳山の黒い雲

あの雲がかかれば雨か嵐か

へ青梅の宿は長い宿

長いからとて物干竿にはなるまい

へ青梅の宿で機織れば

若衆が窓から文を投げてよ

へ拝島の宿はしゃれた宿

水までもこじやりにしゃれて流れる

へ隣りじやもちつく杵の音

おらがではひきわりばなのやきもち

へおさんどんと寝るか餅ちくうか

餅ちやいやよおさんどんと寝るがごしょうらくよー

へお前さんまちまち蚊帳の外

蚊にくわれななつの鐘のなるまで

へ平井はまつち(真土)豆どころ

あたれば豆が八石(はちこく)

(福生地区被調査者全員)

〱十七つれて裏の山へ

うりの葉ねごぎにくるり棒まくらに

〱十七・八は眠い時

井戸端で米とぎおけをまくらに

〱ぼたもちはやる世の中に

おらがではひきわりばなのやきもち

〱嫁をもらうなら大川こえて

嫁ならば板橋かけて渡らせる

〱おらが嫁ごは入さくればへをこく

こくなと言えばなおこく

〱あの山で鳴く鳥は

声も音もよい山のひびきで

〱小田原焼けて江戸盛る

▼ 棒打ち (熊川地区、昭和初期)



小田原女郎衆が江戸へ江戸へ

〱おてんとうさまのきのえねで

かさもかぶらずに

(笹本重一)

土つき歌

昔は家を建てる時、現在の様なコンクリートでの土台の基礎工事は行なはれていなかった。建築現場に高い櫓を組み立て、これに滑車をつけタコと呼ぶ重り材に綱を付けてつるし、大勢の作業員(年配の女性が多かった)によって重り材を一気に上げ落す作業で、家の柱の立つ重要な場所を突き固め、そこに平丸形の石をすえ置き土台としたのである。この作業は、タコをあげて一気に落すという単純なものであるが、歌は作業員の手を揃える事に重要な役割を果していた様である。歌の内容は即興的なものが多く歌われていた様であるが、当市の歌の中には、酒造り歌の道中歌なども取り入れられて歌われていた様である。

〱本町二丁目の糸屋の娘

姉は二十一 妹は二十

ヨーイトノ サンサ

〱碓水峠のあの風車

なにを目あてにくるくると

ヨーイトノ サンサ

道普請の歌

(横田啓介)

〔本町二丁目の糸屋の娘

姉は二十一妹は二十(はたち)

妹ほしさに伊勢へ七たび

熊野へ三ど

芝の愛宕山へみちまいり

(野和田リウ)

機織り歌

元来福生の農業はその地形から畑作を中心として行なわれて居り、その生産物は、大麦、小麦、粟、稗のたぐいのものであった。明治から大正と昭和の初期にかけ採算のとれる養蚕農家が多くなり、陸稲、麦のわずかな反地を残した外はほとんどが桑畑であったといわれている。その当時生産された繭の市が二宮にたち、附近の養蚕農家が繭を持って集まり大変な賑いを見せていたという。

福生にも繭を原料とする製糸工場と機織屋が数多くあり、その代表的な製糸工場には、熊川地区に森田本店(後に片倉製糸、現片倉自転車)糸ひき工女約三百人、山八製糸(糸とり工女約百五十人)

山周製糸(糸とり工女約二百人)、清水より屋(工女約五十名)、福生地区に笹本製糸(糸とり工女約二百人)があった。その外に機織屋(織子三十人から十人)が五・六軒あり、また各農家では賃機が盛んに行われており娘の多い農家では機織機を三台も置いて織

っていたという。そして、働く糸引き工女や織子の人数は実に千人を越していたとも伝えられている。それらの工女、織子は、近くは相模(神奈川県)、武州(埼玉県)、遠くは甲州(山梨県)、信州(長野県)から来ており、その年令は十六才頃から二十五才頃の娘達が最も多かった様である。これらの工女はほとんどが一年契約で雇われるのであって初めの見習いの外は、前年の一年間の糸とり作業の成績によって賃金に段差がつけられるのである。例えば、引く糸の質が標準とする三十五匁を上まわるか下まわるかによって契約金が定められ、三十五匁以上の工女は各工場から引く手あまたで大変なものであったという。その契約は工女が正月休みで国に帰った時期に工女の家々に各工場の番頭が出張して話しあってその年の契約金が決めてられていたのである。また成績の良い工女の各工場の番頭同志が引き合いをするのも此の時期で時期である。

工女達の休みは盆の十五、十六日の二日間と毎月一回位のものであった。またその日が土地の若者と交流の出来る唯一の機会でもあった。したがってその当時製糸工場の休みの日は多摩川の橋は、工女や織子で賑わっていたという。その当時の様子について熊川地区の古老は次のように語っている。

その当時、村には若者の学ぶ青年学校(夜学)があり、小学校の校舎でランプを灯して授業を行っていたが、その小学校の校庭に仕事を終えた工女や織子達が遊びに集まって来る。学生達はその娘達の方に気を取られ、勉強がおろそかになってしまったため、その対策として、夜間の授業を早朝に切り替え朝学とし、これが数年続け

られていたという。また森田本店の工場の堀は一丈（約三メートル）もある高いものであったが、村の若者達はそれに穴をあけ足がかりにし、それをよじ登って工女に会いに行つたという。こうしたほのぼのとした地元青年との交流の中に「糸目三三でもガラ二十五でも貴方に変りやなけりや良い」などの機織歌が生れたものであろう。しかし各工場の諸設備が整備され機械化されてからは、機械に追いまわされて歌など歌う余裕もない忙しさで、歌は、手作業、手機織の時代の名残りのものともいえるのである。

へ来るか来るかと機織やめて

けんを張つたり いるぶたり

あーとんかり とんかり（以下略す）

へ誰れか来たようだ 垣根の外に

口笛吹いて呼んでいる

へいやと云うのに無理やり入れて

入れて泣せる籠の鳥

（萩原トヨ）

へ糸目三三でもガラ二十五でも

貴方に変りやなけりや良い

へ甲州でる時きや涙が出たが

今じゃ甲州の風もいやよ

（斉藤真一）

へ来るか来るかと機織りやめて

あれは川瀬の音ばかり

へ来るか来るかと多摩川べりで

まてど川瀬の音ばかり

へ会いたい見たいは日頃だけれど

まして会いたい今日の日はよー

へ機織が三年かよつたが二年

ほどよくねたのはただ一度よー

へ切れた糸なら つなげばなおる

あの子と切れたにやつなげない

へいればちかえば ばらばら扇子

風のたよりはさらさないよ

へうんてん工女は籠の鳥

せめて空とぶ鳥なれば

青山練兵場に巣をかけて

こがれて泣く声きかせたい

へあいたさ見たさに来るけれど

おな子がいるやらないやら

行くかもどろかうろうろと

のぼせて来るのが恋の情

（久野井トミ）

へごしやよごしやよとかよわせておいて

いまさらいやとは言わせない

（野和田リウ）

糸ひき歌

へそうだそうだよ そうだまっただよそりやそうだよ

富士のすので高まくらよ

そうだいそうだい (以下略す)

へそうだまっただよ親兄弟は

富士のすのでしばまくら

へあのこ思えば照る陽もくもる

晴れたみそらもやみとなるよ

(久野井トミ)

次に機織歌とは全く節(演歌の節に近いもの)を異にしているも

のであるが、工女の歌として熊川地区で歌われていたというものな

ので比処に記する事とした。

へ何んだ熊川大通り

夜の九時頃見わたせば

古けた服装にわら草履はいて

てくてく歩くよ製糸場の工女

じんしゃ袴の女学生をながめ

ほろりほろりと涙をこぼす

もーし旦那様ききたまえ

むかしの暮し見かえせば

今ぢやあわれのこの姿

家ではばーさまが

マニラ麻つなぎの手内職

十七の娘は製糸場の工女

絹はとれども着物は本綿

いつも財布にやひやくもない

(斉藤真一)

以上であるが歌詞の中で、じんしゃの袴とあるは、純紗の袴であ

って、当時布地に人絹が作られる様になったので、純羅紗の袴の事

を、じんしゃの袴と歌ったものではないかと思われる。

(五) わらべ歌

わらべ歌の多くは遊び歌であり、その中でも、まりつき歌が多く

見られる様である。これらの歌の中には伝承する人々の少年少女時

代に過した土地土地に寄って若干の異なりを見せているものの大筋

では同様であった。これはその土地土地の風習や口伝から異なった

ものと思はれる。従って一部の重複を除いては形のととのっている

もののみを選んで記する事とする。また遊び方の違いもある事と思

うのであるが、その伝承者はやはり女性が多く、男性からは明治の

小学唱歌のしっかりしたものを書く事が出来たのも収穫であった。

江戸からお嫁が(手まり歌)

へ江戸からお嫁が来るそうだ

大八車で来るそうだ

大八車がいやならば

男にしよわせてやま道を

歩け歩けとせめられて

歩けばせきだ（たたみ付下駄）の緒が切れる

片方切れたら裁つやる

両方切れたら買つやる

買っているうち日が暮れて

今夜は何処に泊まろうね

おじさんのうちに泊まろうね

おじさんのうちには犬がいて

わーん わーんとおどされる

それではお寺へ泊まろうか

すらば一貫かしました

つきました

江戸からおかめが

〱江戸からおかめが来るそうだ

大八車で来るそうだ

大八車がいやならば

男にしようせてやる道を

歩けばせきとせめられて

歩けばせきだの緒が切れる

片方切れたら裁つやる

両方切れたら買つやる

買っている暇には日が暮れて

今夜は何処へ泊まろうね

（横田タマ）

今夜はお寺に泊まろうか

お寺のうちのししがいて

しーし しーしと人おどす

おじさんのうちに泊まろうね

おじさんのうちには犬がいて

わーん わーんと人おどす

今夜は何処へ泊まろうね

おばさんのうちに泊まろうね

おばさんのうちには猫がいて

にゃん にゃんと人おどす

すらば一貫かしもした

おらがおばさま

〱おらがおばさま四十九で信濃へ嫁にゆく

嫁に行くとして孫衆が笑う

孫衆笑うなとはの国じや

猫が嫁とるイタチが仲人

はつかねずみが三升だるさげて

裏の細道ちよろちよろかける

あがれちやちやのめたばこあがれ

たばこいやなら裏いつてすずめ

ポタンの花が咲いておちるか

ちぢんでおちるか

（伊東ヌイ）

やっさかさ やっさかさ
すらば一貫かし申した
つきました せんそうせん

(細淵ツヤ)

あれみさい

あれみさい むこーみさい

小田原名主のなか娘

色白でさーくら色で

うまく白やにもらわれて

あの白やは伊達の白やで

夏はなーにを着る

黄の縮みの金欄緞子の

青紫きの七重ね七重ね八重ね

重ね重ねて染めてくんよ紺屋さん

紺屋の主人は染めてもあげます

張ってもあげます

おかたをなんとつけます

後ろにやぼたんしゃくやく

前には小ん松唐草

唐草三つの小枝へ鶴と亀とがとまって

鶴は千年亀は万年

毎年お祝いなさるもう子ども

そのもう子供の初の節供に雷雨落ちて

唐かさが三十三本足駄が三十三足

まことし揃えたもう子供

まずまず一貫かし申した

もう子供

天笠てーらのやせーむさんは

ないしよで聞けばかーねもち(金持ち)

おーせどには七藏たてます

庭には小松唐草

唐草ほんしよのどてに

鶴と亀ととまった

鶴は千年亀は万年

お祝いなさるもう子供

もう子供の初の節供に

夕立あめが降ってきて

から傘が三十三本足駄が三十三足

まずまず一貫かし申した

おいもやさん

天から落ちたおいもやさん

おいもの値段はいくらする

五かんする

(田村シズ)

五かんの相場は誰れつけた

八幡ちよちよやおとよめが

良くつけたとほめられて

七つで紅かねつけられて

十で信濃にやったらば

信濃の道で日が暮れて

今夜は何処へ泊まろうか

じゃーじゃーぼーの木の下え

たたみ三じょう酒三升

こがねのさかずき出しかけて

ととさん一ぱいあがりやんせ

かかさん一ぱいあがりやんせ

たかいとこの竹の子

ひくいとこのひきがえる

海のなかの小さかな

すらば一かんかし申した

つきました せんそうせん

(田村シズ)

八百屋お七

〱本所二丁目の八百屋のお七

きょうは番所に呼び出され

あすは役所に呼び出され

たわらのむしろにすわらせて

三尺棒でなぐられて

白のお馬にのせられて

大伝馬町から小伝馬町

小伝馬町の八百屋へとびこんで

あれが八百屋のお七かな

目ほそ鼻たか桜いろ

七さんに惚れるは無理はない

障子のかげできり死んで

一里いっても追いつかぬ

二里いっても追いつかぬ

三里むこうに川がある

せんどうさんまんどうさんくめますか

お水のないのにくめません

金のかんざし浮いたりしずんだり

まずまず一かんかし申した

せんそうせん

(野和田リウ)

あの山で

〱あの山で光るものは

月か星かほたるか

月ならば拝みますが

ほたるならば手にとつて
籠に入れて

あさもばんもピカピカ

すらば一かんかし申した

(横田タマ、田村シズ)

山のいなりさま

へあの山のいなりさまは

なにとなにかだいお好き

あぶらげとなまのとうふと

赤のごぜんがだいお好き

すらば一かんかし申した

(田村シズ)

あなたがた何処さ

へあなたがた何処さ 肥後さ

肥後どこさ 熊本さ

熊本どこさ せんばさ

せんば山には狸がおつてさ

それを獵師が鉄砲でうつてさ

煮てさ焼いてさ喰つてさ

それを木の葉でちよとかくせ

すらば一かんかし申した

(福生地区、熊川地区被調査
者全員)

紀州の殿様

へてんてん てまり てん手まり

てんてん手まりの手がそれで

何処からどこまでとんでつた

垣根を越えて屋根越えて

表の通りえとんでつた飛んでつた

表の行列なんぢやいな

紀州の殿様お国いり

金紋さきばこ供ぞろい

おかごのそばにはひげ奴

毛やりふりふりやつこらさやつこらさ

紀州は良いとこゆめの国

てんてん手まりは殿様に

だかれて紀州にお国入り

すらば一かんかし申した

(福生地区、熊川地区被調査
者全員)

正月

へおんしょうしょうしょう

正月がきたわいな

松たてて竹たてて

よろこぶものは子供衆

だんなのきらいな大みそか

一夜あければ元旦よ

年始ご祝儀おめでたい

おたばこぼんお茶もってこい

すいものなんぞははやがより

なんにおかまいくださるな

こんだまたゆるりとまいります

すらば一かんかし申した

むこう通るは

へむこう通るは ほいやほい

お医者じゃないか

医者も医者だが ほいやほい

薬り箱もたぬ

薬りをようなら ほいやほい

たもとにござる

それを一ぶく ほいやほい

せんじてのめば

むしもおちるが ほいやほい

その子もおちる

おちるその子が ほいやほい

男の子なら

寺にのぼせて ほいやほい

手ならいさせて

すらば一かんかし申した

おらが前の

へおらが前のたけさんは

竹の根っこえ子を生んで

いつかたつてもちちくれぬ

だんなの米をぬすんで

かんでくれたらだまった

すらば一かんかし申した

またこぐり

へまりつきまたこぐり

今日はやりのまたこぐり

伊勢 新潟 三河 信州 神戸

京 いつかん

いんごう にわとり

みみづく

よたか

ごいさぎ

むくどり

(細淵ツヤ)

(田村シズ)

(田村シズ)

七面鳥⁽¹⁾ 山鳥⁽²⁾ くじゃく⁽³⁾ とんび⁽⁴⁾ につかん

(田村シズ、久野井トミ)

かぞえ歌

へいちばん始めは一の宮

二は日光の中禅寺

三は佐倉の宗五郎

四はまた信濃の善光寺

五つ出雲の大社(やしろう)

六つ村々鎮守様

七つ成田の不動様

八つ八幡の八幡宮

九つ高野の弘法様

十で東京招魂社

これまで心願かけたのに

いちやもごりやもくださらぬ

すらば一かんかし申した

(福生地区、熊川地区被調査者全員)

お寺のげんか

へお寺のげんかですまりつけば

坊さんたちが寄り合って

せんべいくれべい

かしくれべえ

あんまりだますなくそ坊主

すらば一かんかし申した

(田村シズ、萩原トヨ、井上キヌ、石川ユリ、野島房子)

一年生(唱歌)

へてんでん手まりの音のかず

ひーふーに三つ 四つ 五つ

六つとかぞえて七つになると

私は尋常一年生

あら嬉しいな 嬉しいな

(高水茂一)

川口島(お手玉)

へさいりょう山は霧ふかし

千曲の川は波あらし

はるかに聞こえる物おとは

さかまく波かつわものか

昇る朝日の旗の手に

ひらめくいまにくるくるくる

くるまわりの陳そない

まかりのぎおんとなり
めぐみあはずの時の声
あわてるかきもあわしなく
てきはこのはとかきみたす
川中島のたたかいは
かたるも聞くも勇ましや

(福生地区被調査者全員)

万国一の夢の宮
神も仏もあるものか
ああ夢の宮 夢の宮

(久野井トミ)

かぞえ歌(お手玉)

- 〱いちばん始めは一の宮
二は日光の東照宮
三は佐倉の宗五郎
四はまた信濃の善光寺
五つ出雲の大社(やしろう)
六つ村々鎮守様
七つ成田の不動様
八つ八幡の八幡宮
九つ高野の弘法様
十で東京招魂社
これまで心願かけたのに
浪子の病いはなおらせぬ
ああ夢の宮 夢の宮

一人ぢや淋し(お手玉)

〱一人ぢや淋し 二人ぢやまめしよう
みわたつのでは よめなになんぼ
いもとのすきなら むらさきすみれ
菜の花さいた やさしき蝶は
ここやとままと とまっておいでしよ

(久野井トミ)

羽根つき歌

〱ひとりきな ふたりきな
みてきて よつてきな
いつきてみても
ななこの帯を やの字にしめて
ここのように 十うよ(一貫よ)

(田村シズ、久野井トミ、井
上キヌ、石川ユリ、野島房
子)

ずいずいずつころばし(遊び歌)

ずいずいずつころばし　ごまみそずい

茶つばにおわれてどっぴんしゃん

あけたーらどんどこしよう

俵のねずみが米くってチュ　チュチュチュ

お父さんが呼んでも

お母さんが呼んでも

行きつこなーしよ

井戸のまわりでお茶碗かいたの誰ーれ

(萩原トヨ、井上キヌ、石川

ユリ、野島房子)

障子開ければ(遊び歌)

正月せー障子開ければ万才が　つつみの音やら歌の声

ささ　ほいほいほい(以下略す)

二月とせーにんじまいりは寺まいり　お寺を開いて祝いませう

三月とせーさくら花にはお姫さま　飾って見事なだいりさま

四月とせー死んでもまた来るお釈迦さま　竹の子びしゃくで茶々

あがれ

五月とせーごんごはやりの前掛けを　お正月かけよととつといた

六月とせーろくに田の草とらないで　お米が取れないとお腹だち

七月とせー質を取るやら入れるやら　質やの番頭さんは忙しい

八月とせー蜂にさされて目がはれた　そこらにおくすりないかい

な

九月とせー草の中には菊がある　通る子供の見にかかる

(野島房子)

(この歌は十二月迄続けて歌っていたものであるが今回の調査では明解にする事が出来なかった。)

ぞうり

ぞうりたんじょう　いいたんじょう

にいてもやいても　うらほ

とーどーめくどーが

杖ついて通らば

そりゃ　そちえつんぬけろ

さんめのこ(遊び歌)

ひとりふたり三めのこ

とおつてなめる仙次郎

橋のしたのくそかき棒

橋おれ目くそで緑の下のとうりくそ

にげるものにだんこ

大ーもの大泥棒

なかのなかのひとつぶは

お米を三杯くって

それで背がひくいんだ

(田村シズ)

開いた開いた(遊び歌)

へひらいたひらいた 何んの花が開いた
紅の花が開いた 開いたと思つたら
いつのまにか一つぼんだ

(福生地区被調査者全員)

七月八日のたたかいは

ハルピンまでも攻め入って

クロバトキンの首をとり

東郷大将ばんばんざい

(福生地区被調査者全員)

いちぢく人参(遊び歌)

へいちぢく人参 さんしょにしいたけ
こぼうにむすび 山芋こんにやく
とうふ漬け菜がしよさんしょつくらべ (食競べ)
勝つても負けても食べくらべ

ヨイヨイヨイ

(井上キヌ、石川ユリ)

今年のボタン

へ今年のボタンは良いボタン

お耳をからめてスッポンポン

お耳をからめてスッポンポン

あなたの顔はへびのよう

(熊川地区被調査者全員)

日露戦争(遊び歌)

へいちれつだんぱん破裂して
日露戦争はじまった
さつさと逃げるはロシヤの兵
死んでもつくすは日本の兵
五万の兵とたたかって
六人残してみなごろし

まりつき歌

へ北方(きたがた)へ嫁にくれるな

夜機(よばた)織るのがつらいよ

糸切れてくだがめどれて

油がきれてとろとろ

(細淵ツヤ)

遊び歌

へ日向和田石灰山を行きすぎて

かんよりの渡しを舟で越して

御岳神社は吉野の梅林行きすぎて
御岳神社は雲の上海抜三〇一四尺

どんどん

(野和田リウ)

まりつき歌

新茶よりもお茶屋のこむすめにちよいとほれた

ほれたなら抱いてねましょか

むこうの木の根をまくらに

すらば一貫借しました つきました せんそうせん

(久野井トミ)

私の人形(唱歌)

私の人形は良い人形

目はパッチリと色白で

小さい口もと愛らしい

私の人形は良い人形

私の人形は良い人形

歌を歌えばねんねして

一人で居ても泣きません

私の人形は良い人形

(高水茂一)

坂道(唱歌)

雨にくずれた坂道を

やまのよーな荷車が

えんやらやーと登り行く

道が悪くて気の毒だ

まっしておちさんぼくがいま

えんやらやーと押してやる

(高水茂一)

天神さま(唱歌)

天神さまという方は

おん名は菅原道具公

学問深く徳たかく

君に忠義の心あつく

時の大臣 時平に

そねみを受けて九州に

流されたれど天皇を

いささかうらみ奉まつらず

賜りたりしお絹衣を

とურიいたして天皇の

厚き恵みに泣きたもつ

あとうをとつやが人の鏡

(高水茂一)

たいざん先生（唱歌）

雪はともえと降りしく中に
大きい傘に少さなからだ
師匠のもとへと急ぐは誰れか
これこそ小川たいざん先生
降りつむ雪につまずき転び
何処からきたか一人の男
助け起して雪うち払い
家に帰れと進めたけれど
たいざん先生ひるまずおさず
またもや降りつむ雪道おかし
師匠の家にとようやく着きて
その日の稽古をすませたとかや

（高水茂一）

子守り歌

子守歌はあまり歌われていなかっただらしく少数の歌詞しか残されて
いない。またその歌詞の内容にも遊び歌と思われるものもある
が、これは子供達の生活の中で同じ歌詞を節を替え色々な歌とし
て歌っていた様であり、遊び歌を子守歌として歌った事もあつた
事と考えられるので、調査当日、子守り歌として歌われたものを
記することとした

へねんねんころりよ おころりよ

坊やお守りは何処へいった
あの山越えて里へいった
里のみやげに何もろた
でんでん太鼓にしようの笛
なるかならぬか吹いて見ろ

（福生地区被調査者全員）

へ私はこの家に嫁に来て
朝は早よから起こされて
六十九枚の戸を開けて
すみから隅まではきだして
朝のおかずは何ざやいな
しいたけ かんびょう がんもどき

（福生地区被調査者全員）

へのうのうさんいくつ

十三 七つ

まだ年しゃ若いな
ねねさんを生んで
だれにだかしよ
おまんにだかしよ
おまんおまんどこいった
油かいに茶かいに

油屋の前に氷がはって

すべってころんで

油一升こぼした

その油どうした

太郎どんの犬と

次郎どんの犬が

みんななめてしまった

その犬どうした

ぶっころしてしまった

その皮どうした

太鼓に張ってしまった

その太鼓どうした

つんもしてしまった

その灰どうした

麦にまいてしまった

その麦どうした

ガンが食ってしまった

そのガンどうした

一里さき二里さき

三里さき とんでった

(福生地区、熊川地区被調査

者全員)

へおかめひよっとこ面でもらいてなけりや

売ります二宮の神楽師へ

(田村シズ)

(井上・天野)

鏡つき松さん

昭和の中頃までは福生神明社も、こんもりとした杉の木立に囲まれた静かな神域であった。

まだ現在の東側の広い道路は出来ておらず、西側が正面となっていた。境内の西北部の隅に、どんな渇水にも涸れたことがない湧水があり、これがこんこんと流れ、堂川とよばれていた。(昭和三十七年下水道の工事で水派が断たれ全く水が出なくなり、今では道路の排水溝になっている。)

この堂川の石橋を渡り、鳥居をくぐり石段を登ると、正面に茅葺き屋根の素朴な、小さな社があり、その右手に鐘楼があった。これは葉師堂のものだが、この釣鐘を、夏も冬も、朝に夕べに休むことなく突き続けていた「松さん」という背の低い子柄な老人がいた。

この鐘つき松さんの事を小学校四年の中根サキさん(大正十四年生まれ)が書いた詩を、担任の榎先生が雑誌に載せられた。

ところが当時ハーモニカ界の大家、宮田東峰先生がこの詩をみて自ら作曲され、その譜を榎先生へ送られてきた。そしてこの歌が西多摩郡の学芸会で発表されると、たちまち多くの子供達が歌うようになり、当時の子供達に親しまれたが、現在は殆んど忘れ去られてしまっている。

鐘つき松さん

一、朝は早くから 鐘がなる

鎮守の森から 今日も又

ゴーン ゴーンと

二、遠い森から 今日も又

鐘つきまつさん 鐘ならす

ゴーン ゴーンと

五時を合図に 早起き

まつさあーん

(橋本)

(六) 酒造り歌

酒造り歌は、かつて酒をつくる作業工程の中でなくてはならない存在であった。大勢の酒造り職人達が仕事交替の替る歌う歌が、何回繰り返し歌われたか、あるいは時間のかかる作業などに歌われる「道中歌」が、今何処の宿を歌っているかなどと職人達の歌声を聞きながら仕事の進み方を杜氏（酒造りの責任者）は監視し、種々と指導をしていたのである。この世界では、歌半金（一日の日当の半分のこと）という言葉があるほど歌が重視されていたのである。それは真冬の朝早く（深夜）から冷たい水仕事に始まる重労働を励げまし、大勢の職人達の共同作業の気を揃え仕事をスムーズに進める事にも大いに役立っていたからである。

これら酒造りに従事する者の多くは農村からの季節労働者であった。これらの人々の出身地は雪国が多く、冬場の農作業が全くと言っていいほど出来ない地域が多い。耕地面積にも山国の田畑には限界があり収入の点でも限界があるため、村の若者達のほとんどが唯一の冬場の出稼ぎとして、過酷ともいわれる米つき、酒造りの仕事に進んで従事したのである。またそれらの地域には酒造りの技術者が多くいたのである。その地域の主だったものをあげて見ると次の地区である。

南部杜氏（岩手県） 秋田杜氏（秋田県）
芥屋杜氏（福島県） 越後杜氏（新潟県）
能登杜氏（石川県） 越前杜氏（福井県）

丹後杜氏（京都府） 丹波杜氏（兵庫県）

但島杜氏（兵庫県） 出雲杜氏（島根県）

諏訪杜氏（長野県） 伊予杜氏（愛媛県）

能毛杜氏（山口県） 西条杜氏（山口県）

以上であるが、これらの杜氏職人衆の歌っていた酒造り歌を各地区毎に何々流といていた。（例えば越後流、丹波流、しかしその歌の全曲が違っていたものではなく中には共通した歌詞も少なくなかった。

かつて関東地方の酒蔵（酒造店）に稼ぎに来ていたのは、ほとんどが越後杜氏のひきいる職人衆であった（戦後南部杜氏が一部に入る）。彼等は諸々方々の村々から定められた集合場所（直江津・十日町など）に集合して一杜氏・一組毎にまとまって出かけて来るが、その時期は初雪のちらつき始める十一月始めの頃である。そして碓氷峠または三国峠を越えて、高崎、熊谷、入間などの口入屋（私設職安の様なもの）に集まって自分達の働き先の酒蔵（蔵元とも）の紹介をもらうのであった。信用のある杜氏の組衆はすぐに働き先が決まり毎年同じ酒蔵に雇われていたのである。その一つの理由は、蔵クセと云ってその杜氏の造った酒が蔵元の味ともなり、それが伝統になっていたのである。したがって杜氏はその蔵元のクセ（独特の技術）を早くのみ込む事が大切であり、そうした杜氏は蔵元に歓迎され毎年雇われていたのである。

福生には、田村酒造（嘉泉）、石川酒造（多満自慢）の二社の老舗があり、いずれも東京の銘酒として知られている。現在田村酒造が

南部杜氏（岩手県北上市）、石川酒造が越後杜氏（新潟県松代町）、で、伝統的な酒造法で銘酒造りを行なっているが、その作業工程の機械化により歌を歌って作業をするということもなくなり、自然と酒造り歌も特別の席以外は歌われなくなってしまっている。

歌を歌いながら酒造りの仕事が進められたという作業の工程は次の様なものである。

水汲み、米洗い、蒸冷し、麴造り、仕込み、暖気入れ、甑とり、捻り餅、酏すり、權入れ、酒しぼり、であるが、その中で最も大変なのが米洗いである。早朝（真夜中）米洗いの番に当った若者達が槽頭なながしらを長に四、五名で米洗いが始められるのである。身を切る様な寒さと凍る様な冷水の中で、ハッピー一枚、禪一本の姿で、桶に約一斗の米を入れ素足でザックザックと洗うのである。この際歌われる歌詞が一般の人にも伝わり、盆踊りや機織り歌などの中にも聞くことができる。

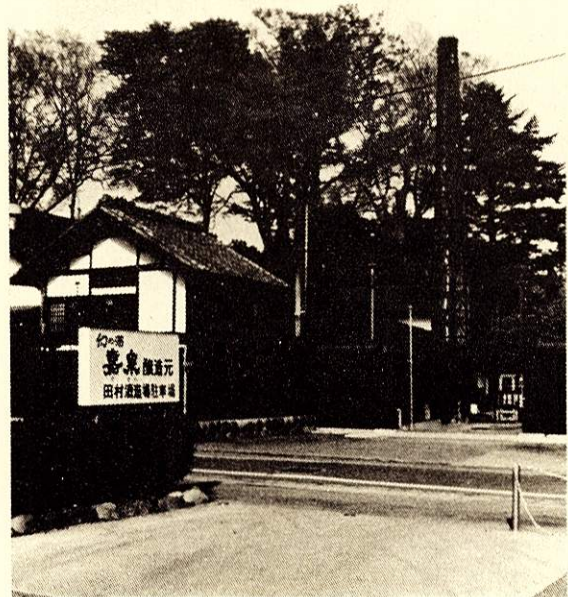
へ今朝の寒いのに 洗番はどなた

いとし殿御で なけりやよい

（または殿御の声をする）

(1) 田村酒造場

田村酒造には現在岩手県北上市から、杜氏の川村昭二氏（昭和二年生れ）外七名の蔵人が来ており、十一月中旬から翌年四月中旬まで酒造りの作業を行っている。作業の開始に先立ち、伝統的な儀式「酏日待」が行われるが、この中で作業歌である酏取り歌が全員に



▲田村酒造場

よって歌われる。この「酏日待」という儀式は、酒造りの職制身分、つまり杜氏・頭・糶屋の三役と酏屋・二番・船頭・釜屋のそれぞれ役割り分担を杜氏が決めて告げることから始まる。そして杜長の挨拶の後、酏取り歌が歌われる。次に冷酒、燗酒の順で振舞われ楽座となる。それまで正座の姿勢をくずしてはならない。四月に酒造りの作業が終了した時にも「甑だおし」という儀式が行われる。

酒造り歌は作業の時間を計ったり、湯や水を汲む回数を数えたりするのに利用されていたが、戦後酒造りの工程の機械化により、直

接作業には必要でなくなつてしまつた。今では、伝統的な儀式の中で歌われる程度である。

南部流し歌(桶洗い歌)

(独唱)
寒や北風 今日南風

(合唱)
明日は浮名のたつみ風

(以下独唱合唱を略す)

寒いや北風 可愛いそや子供
賽の河原で石を積む

賽の河原で 石を積みや砕く

砕きやまた積むまた砕く

今朝の寒さに 洗い番どなた

可愛いや殿さの声がする

可愛い殿さの 洗い番の時は

水も湯となれ風吹くな

可愛い殿さは 今日何なさる

足がだるかる眠むたかろ

足もだるかぬ 眠むとうないが

私は貴方の事ばかり

可愛い殿さに 百日させて

家で炬燵にあたりりよか

酒屋百日は 乞食よりおとる

乞食きや夜はねる樂もする

乞食きや夜は寝る 樂はするけれど
門に立つのが辛うござる

この外約二十曲続けられるが此処では略す事にする。

米研き歌

(中)
ザクリナーエ ザクリトーヤ

今に研く米でヨー

(中)
お酒ナーエ造りてや

チヨト江戸に出すヨー

(中)
お江戸ナーエ 出す酒は

名のサーよいよお酒ヨー

(中)
酒はナーエ 嘉泉にー

チヨイト幻(まぼろし)ヨー

酩摺歌(荒酩摺唄)

(独唱)
荒酩は樂だと見せて

(合唱)
樂じゃない

(独唱)
何仕事事に樂は

(合唱)
ありゃしない

ヨイトコソーリヤ

サノナーヨイ

(以下独唱合唱及ハヤシ言葉略す)

山鳩は酒屋の破風に

巢をかけた

夜が明ければ酒売り出せと

さえずるよ

〱南部では高さも高い

岩手富士

見下ろせば盛岡市街（イチ）が

目の下に

〱名所では石割桜

お城跡

清らかな北上川が

流れる

〱恋しくば訪ねてござれ

花巻に

春なれば桜の花が

待っている

〱夏なれば釜淵の滝

夕涼み

秋なれば四方の山は

紅葉に

冬なればお風呂をあびて

炬燵酒

〱気仙坂七坂八坂

九坂

十坂目てて鉦かけて

平めた

それはうそ御人足かけて

平らめた

〱乙部町柳の葉より

狭い所

狭いとて一夜の宿で

銭をとる

〱松前は南部の果の

離れ島

離れても一夜の宿で

銭を取る

〱仙台の宮城ヶ原の

萩の花

咲き揃ふて錦にまさる

萩の花

〱頼みます左（または右）の方

頼みます

文句のよい声張り上げて

頼みます

〱酩酊本調子

〱トロリトロリとやーエ 出た声なれば

声をとられたヤーエ 川風にヨ―

〱川のなる瀬に 絹機たてて

波に織られて 瀬に着せる

〱揃うた揃うたと 南部衆が揃うた

秋の出穂より なお揃うた

(続いてこの後十五歌詞が歌われるが略す)

酩酊歌

〱初夜の鐘なら 千里もうなれ

うなれうなれよ 六つの鐘

〱夜中起きして 酩酊く時は

親の家での 事おもう

〱親の家での 朝寝の罰で

今は早起き 夜中起き

〱眠むた眠むたよ こう眠む満てば

永の冬中が 務まらぬ

止歌

この止歌は酒造り歌の最後に歌われるものであって、全国の酒造り歌に共通するものである。歌の中に松尾さんとはあるは、酒造の神様である京都の松尾大社の事である。

〱よからよからと松尾さんのお告げ

これで仕舞ならお目出度い

〱歌の仕舞は何んと云うて止める

酒屋ご繁昌と云うて止める

〱酒屋ご繁昌ならその歌返せ

酒屋ご繁昌と云うて止める

〱千秋楽にはこれ限りない

鶴と亀とが舞い遊ぶ

〱わしも商売じゃその歌たのむ

酒屋ご繁昌と云うて止める

〱酒屋歌止め何んと云うてとめる

酒屋ご繁昌と云うてとめる

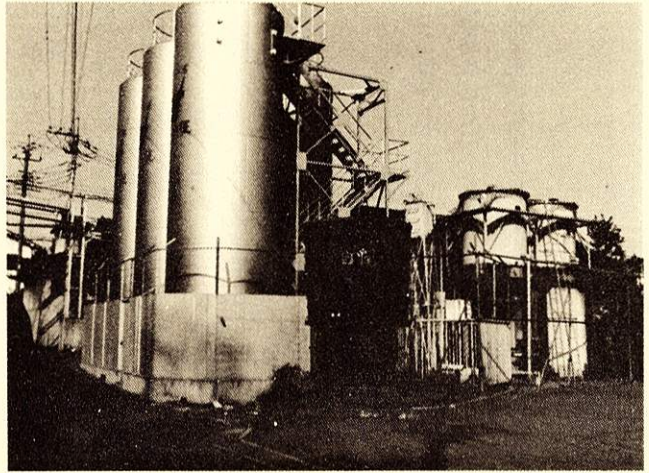
〱聞けば目出度いその歌返せ

酒屋ご繁昌と云うてとめる

(2) 石川酒造(株)

石川酒造には現在新潟県東頸城郡松代町から、杜氏小山光彦氏(昭和十一年生れ)外十八名が酒造りに来ており、田村酒造と同様に十一月から翌年四月まで作業をおこなっている。その人々からかつての酒造りの様子、酒造り歌について聞くことができた。

酒造りに働く人達は、昔は小学校が終わるとすぐ出稼ぎに出た。この仕事は熟練が要求されるが、下働きができるようになるまでには、最低でも二冬はかかった。作業の中で、熱湯、もろみ、酒とすべて樽を肩にかついで運ぶのであるが、それらの樽をかつぐことも一冬ではなかなかできなかつた。働く期間は十一月から翌年の四月



▲石川酒造株

までで現在とあまり変わりはなかった。雪の降り始める頃家を後にし、松代町から直江津、十日町、やすだ（柏崎市、信越線やすだ駅）のいづれかの町まで出てから汽車で来た。十日町に出るまで歩いて半日〜一日がかりである。

汽車のない時代には、北国街道あるいは三国街道を使い、碓氷、三国の峠を越えてやってきたが、埼玉入間の口入屋、越後屋まで六、七日の行程である。現在では自動車で来るので、石川酒造まで六〜七時間である。

始めて石川酒造に来た者は、門の前に置いてある砂の入ったイタ

ミ樽（四斗樽）をかつがされ、かつげない者は使い物にならないと使ってもらえなかった。作業は蹴しておこない、寒い冬の早朝の流し、洗い物など歌でも歌わなければ仕事にならなかった。現在では釜屋役が朝四時頃起きてボイラーに火を入れ、その外の職人は五時頃の起床となっている。作業の工程は昔とあまり変っていないが機械化により多少は楽になっている。

酒造り歌が歌われなくなった一つの原因に戦争がある。戦争で食糧難となり、酒造りもおもむにまかせず年寄たちが次々とやめてしまった。石川酒造でも三十人位いた職人が五人位になってしまい、歌も自然ととぎれてしまったのである。昔は秋に蔵元へ入って米を洗う時、身を清めお祓いし、次にささやかな祝いの宴が行なわれ、その前で必ず歌を歌ったのである。正月元旦にも酒宴の前に必ず酒造り歌を歌っていた。そして三月に仕込みが終わった後、「甑たおし」の時も酒宴の前に必ず歌っていた。

酒造り作業歌の歌詞はたくさんあった。その中で数え歌は、汲水の時、頭が一斗づつ汲むが「はじまつたり一の…二…おさんがさんし、なんさんだ…」等二十まで数える。そして又最初から歌い始めそれを繰り返した。その何回目で汲み終りという仕事の目安やすとなっていたのである。

流し歌（桶洗い歌）

へハー今朝のヨー流しは ハハー二番か船頭

終り流しは 釜屋さん ソローソロ

(以下ハヤシ言葉略す)

〱踊がなるかよ しごきがなるか

桶としごきが合えばなる

〱蔵じや親方 お頭よりも

私しが好いたが二番さん

〱流し出た時 鬼かと思つた

抱いて寝てみりや猫のよう

〱酒屋さんとは 知らずに惚れた

花の三月泣き別れ

〱可愛い主さん 流しの時は

水も湯になれ風吹くな

〱声はすれども 姿は見せぬ

可愛いお方は桶の中

酩取り歌

(並唱) 〱とろりとろりとナーヤーエ

今つくヤーエ 酩は

(各唱) 酒に造りてヤーエ江戸に出すヨ

(以下ハヤシ言葉及び独唱合唱略す)

〱江戸え出すとは 昔のこと

今は世が世で地ではける

〱地でもはける酒は名取の銘酒

酒は手づくり多満自慢

〱酒は手づくり多満自慢よりも

私しが好いたは色娘

〱今年しや目出度い ツバメの鳥が

サスのやなかに巢をかけた

〱サスのやなかに巢をかけおけば

亀がお庭で舞遊ぶ

〱ツルと亀とが なんて言うて遊ぶ

酒屋繁昌と舞い遊ぶ

〱だれもどなたさんも こらでちよいと

タバコすいませよ ながタバコ

石川流仕込歌

(各唱) 〱一つ上げましょいや ホイ

音頭取り様はヨ

(各唱) ハアーヨイヨイ

声も枯れます エンヤラサー

(各唱) ヨーサンヨサドッコイサンヨサエンヤラセ

(以下合唱及びハヤシ言葉略す)

〱だれか来たそうだ 流しの外へ

泣いた松虫コリヤエンヤラサー

〱目出度目出度がヨ 三つ重なれば

ツルが御門にコリヤエンヤラサー

〱沖でタイ釣る 浦島太郎は

竿になげばりまたエンヤラサー

〱調子か揃うたら チンヤリ早めて

シヤンにもしようかい ヨイシヨ

ヨイシヨ ヨイシヨ ヨイシヨ ヨイシヨ

シヤンシヤン

二番權 (仕込み歌)

〱ソーリヤ今宵ナーエーヨーホイ ヨーホイ お倉でーヤ (合唱) ホイ

今突くヤ留は

(合唱) ソーリヤ 酒にナーエーヨーホイヨーホイ造りてーヤ (合唱) ホイ

ハアー江戸え出す

(以下合唱及ハヤシ言葉略す)

〱江戸え出すとはーや 昔のことで

今は世が世で地ではける

〱今宵お倉は目出度いお倉

小金 切窓銭すだれ

〱目出度目出度三つ重なれば

ツルが御門に菓をかけた

〱だれも どなたも ころらでちよと

タバコすいませよ ながタバコ

三転歌 (仕込み歌に引続き)

〱チヨツコラ一服しようかいな

(合唱) おいらも真似して しようかいな

あとから三転お願いだ

(合唱) ヨイトセー

〱揃うた揃いましたノーホイヤ

一転二転で四転に

足りない三転突きや揃ろうた

中で二、三本がノーホイヤよく揃ろうた

(以下合唱及びハヤシ言葉略す)

〱竹に雀は

あつちの藪から こつちの藪まで

チンチンバタバタ

小羽を揃えて品よくとまる

留めてとまらぬ 色の道

〱竹の切り口

すこたまこたまになみなみ

たっぷり溜りし水も

澄まず濁らず減りもせず

〱ヨーホイ 変ります

大社の浜に

船が二槽出た三槽出た

〱ふねが二槽なら

押し上げて仕舞うて

仕舞うて呑みませよ 長酒を

〱女郎の女郎の文さえ

終りはかしこ

千秋楽とは お目出度い

この外に長時間の作業には、伊勢音頭、数え歌、道中歌などが歌われており、特に道中歌は越後社氏や酒造り職人衆が江戸に働きに来る時に見たもの感じたものを、そのまま歌ったものである。当時の中仙道の宿々の風俗を知る事の出来るものであるが非常に長い歌なので、実際に歌われていたのは高崎宿までであったといわれている。

仲仙道道中歌

〱アーヨイヨイヨイ

(独唱) 今宵屋形で 今突く添は

(合唱) 酒に造りて江戸え出す

(以下独唱合唱及ハヤシ言葉略す)

〱江戸え出しては

名のあるお酒

酒は八重梅 多満自慢

〱多満自慢より八重梅よりも

私のすいたは 色娘

〱お江戸日本橋 中から折れて

諸国諸大名の 足とめた

〱諸国諸大名の 足ならよいが

可愛い主さんの 足とめた

〱何時がお江戸出て 板橋越えて

戸田の渡しを 朝の間に

〱戸田の渡しで 今朝見た島田

男なかせの 投げ島田

〱男なかせは いくらもあるが

女子なかせは 主一人

〱次は蕨宿 棕櫚箒いらぬ

あまた女郎衆の 裾ではく

〱ここは蕨宿 葦なら二本

思い切るよし 切らぬよし

〱次は浦和宿 小鳥が住まぬ

住まぬ筈だよ 鷹が住む

〱次は大宮宿 氷川の神社

あれが武蔵の 一の宮

〱次は天神橋 石代の辛子

買うて行かんせ 旅の人

〱上尾女郎衆と 秩父の山は

西(二朱)じゃ高いと 人がいう

〱次は鴻の巣 九丁半なれど

中の二三丁が ままならぬ

〱少しまわって 行田の城は

地から生えたか 浮城か

〱忍の行田に 過ぎたるものは

日野屋三店 隅櫓

〱久下の権八 地藏の頭が丸い

鳥とまれば 投げ島田

〱久下の土堤から 熊谷見れば

牛が化粧して 客が待ちよる

〱次は熊谷 蓮生坊の墓所

お経の声する ありがたい

〱またも熊谷 吉原まがい

裏に田もある 土堤もある

〱次はしがらき 名代の茶漬

食べて行かんせ 旅の人

〱深谷並木が 明るくなれば

内の街道が 暗くなる

〱腹が立つ町 身は横町よ

機嫌なほしの 稲荷町

〱深谷出てから 牧西迄は

雨は降らぬに 袖絞る

〱本所台町 五百できまる

酒と肴で 二朱かかる

〱酒と肴で 二朱でもよいが

夜具の損料で 足が出る

〱次は新町 お菊の稲荷

俺も二、三度 だまされた

〱次は倉賀野 太鼓の橋よ

手形なくては 通られぬ

〱上州なれども 高崎お江戸

お江戸に勝れた 女郎がない

〱見たか見て来たか 高崎田町

紺ののれんが そよそよと

〱紺ののれんに 松屋と書いて

待つ(松)に来ん(紺)とは 気が知れぬ

以上が高崎宿迄のの道中歌であるが、この先の酒屋職人達に関係するものを二三記しておく。

〱次は横川 天下の関所

手形なくては 通られぬ

〱手形なくして 通れん時は

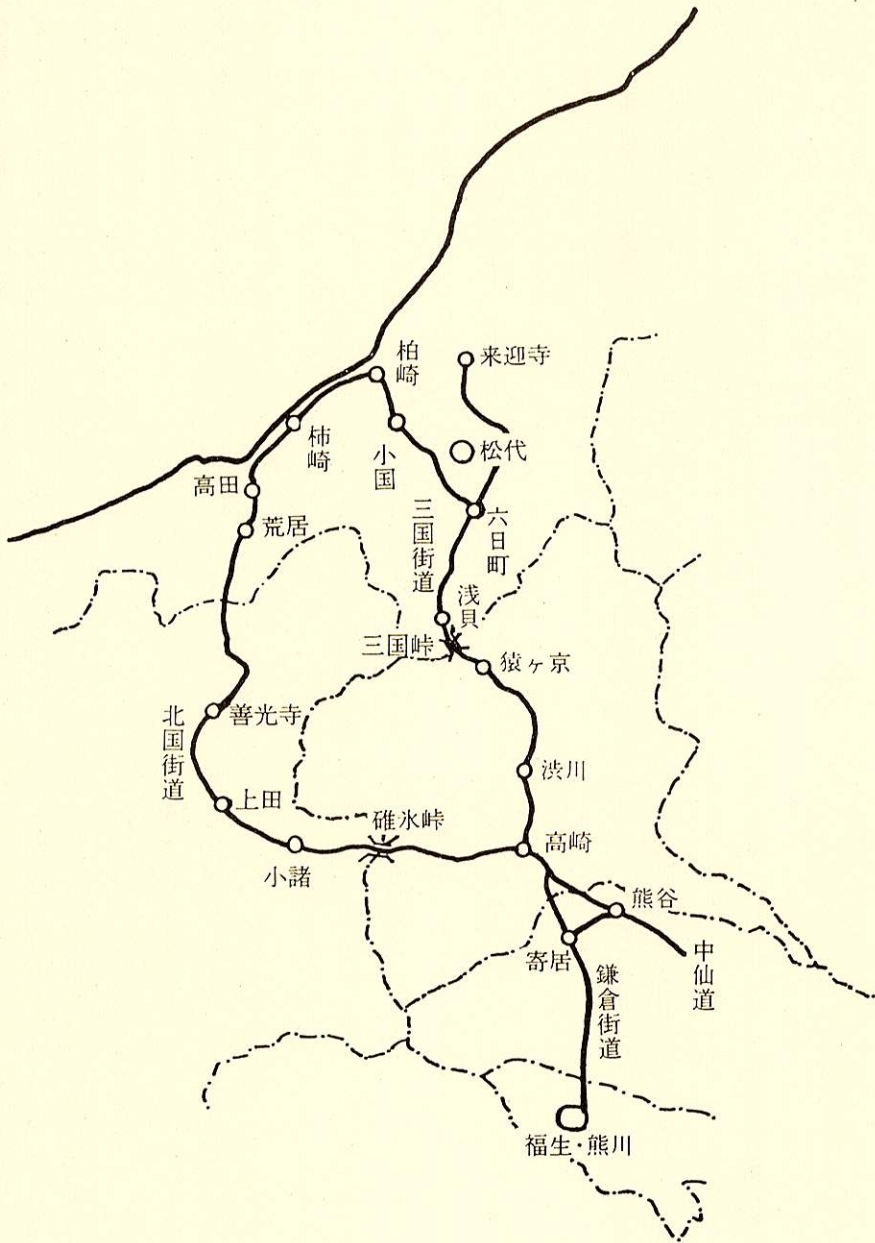
酒屋者だと 云うて通れ

〱軽井沢とは 誰れが名をつけた

一夜泊りの酒屋者

以上が田村酒造、石川酒造の両酒造場の杜氏達の歌う酒造り歌の抜粋であるが、これらの歌は酒造り職人のみではなく、附近の住民もこれをおぼえて種々の宴席で歌っていた。

▼越後—関東道中図



村人の酒造り歌

へ米研ぎいなさよ始まる時は、鶴と亀
鶴と亀さよおーながしに下りて舞い遊ぶ

ヨイトコー オーリヤ サノヨーエー

(以下ハヤシ言葉略す)

へさーさんさ酒屋のよい 始まる時は

いかもしやくしも ありや手につかぬ

へあー酒は良いもの 気いさむものやい

のんだ心きはやん ありや富士の山よー

註(1) 以前は越後杜氏(新潟県上越市直江津地区出身)であつ

たが、昭和五十年から南部杜氏となつた。これは直江津地

区が工業地域として整備され、地方に労働力を求めたこと

から、それまで酒造り職人として県外に出ていた人たちも、

地元で職につくことが可能になつたためである。

かつての南部杜氏の活動範囲は、主に北海道、宮城県であ

つて、関東地方にまで範囲を広めたのは交通機関が発達し

てからのことである。

註(2) 湯や水を汲む時は数え歌が歌われるが、田村酒造の南部

杜氏の場合、酛取り歌、仕込み歌が歌われていた。

註(3) 小山光彦氏の伝承によれば、越後屋は関東の酒蔵に酒男

を斡旋する代表的な口入れ稼業で、文政年間、三代目越後

屋惣七の時代に全盛期であつた。(「酒造りの今昔と越後

の酒男」(中村豊次郎)によれば、当時関東一円に勢力を
持ち、その口入稼業持株は一〇〇〇両を越えていた。)

このよつな口入稼業の者を「ケイアン」と呼び、出稼人は
秋の取り入れが済むと自分の働き口を求めて、これら口入
稼業の親分のところをめざして旅立ち、そこに一日、二日
寄留して仕事を紹介してもらつた。「ハツイギ」(初行、
初めて出稼ぎに出る者)の場合、特にこれといったあてが
ないため、近隣の先輩に連れられて親分のところに行くが、
親分はその年格好、体格、性格などを考えて自ら請人(保
証人)となつて職場を紹介した。職が決まるまで滞在させ
てくれるが費用は一切取られなかつた。職場が決まると求人
者、求職者の双方から紹介料を取つていた。(求職者から
は出稼ぎ期間中の給金の五分(ハンセン)を取つていた。
親分は保証人である以上、仕事を斡旋した出稼人が病気に
なつたり、悪事をはたらいたりして雇主に迷惑をかけると、
雇主に對しすべての保証をした。)

註(4) 新潟と関東を結ぶ鉄道として信越本線、上越線がある。信
越本線は、明治十八年に高崎と横川が、同二十一年に直江
津と軽井沢が開通した。上越線は昭和六年に高崎と宮内間
が開通した。

(井上・天野)